

むようになった。

月一回の指導員会を含めて月に二、三回、多いときは四、五回もいっしょに飲んだ。そこで話の主題となるのは、いつも衛生指導員のあり方のことである。「指導員の活動はどうあったらよいのか」「指導員会をまとめていくにはどうすればよいのか」など、誰もが悩んでいたことだった。

二人は、八千穂村の飲み屋は全部歩きつくし、さらに佐久町、臼田町へも足を延ばした。何回も飲み屋へ通ううち、飯島さんは、飲み屋にいる猫の顔は全部覚えてしまったという。

その中で、「衛生指導員は、住民代表として各担当地区で会合や学習会を開き、住民の健康意識を高めると同時に、そこで出た意見を役場や病院へつなげ、住民主体の健康管理をつくりあげること」という、高見沢イズムが出来上がっていった。

病院の八千穂担当と衛生指導員たちが、あまりにも親しく何回も飲んだりするので、役場からは、「ありゃ、病院の衛生指導員だ。役場のもんじゃないぞ」というやつかみの声も聞かれた。

しかし、それも須田芳明さんが保健衛生係長になり、続いて佐々木勝さんが後を継ぐことになって、次第に消えていった。これには二人の積極的な取り組みもあったが、もう一つは酒の力があつた。二人とも指導員会の後の飲み会には必ず出るようにしたのである。これで指導員

とのコミュニケーションがよくとれるようになった。

「看護師はみな豪傑だね」

実のところ佐々木係長さんは最初は戸惑っていた。佐々木さんは十五年前に設計士として役場へ入った人である。建設畑をずっと歩いてきて、十年目になって急に移動となり、保健衛生係長を命ぜられた。保健衛生といっても経験がないし、よく分からない。役場というところは課が違ふとやっていることがよく見えないのだ。おそろおそろ課長に聞いたたら、「衛生指導員といっしょにやるところだ」と言われて一瞬跳び上がった。

衛生指導員と役場とはかつていざこざがあったことがある。うまく衛生指導員をまとめていかねば、これは大変なことになる。「これはえらい所へ来た」と思った。

だが、指導員会の飲み会に毎回に出るようになって、お互いに打ち解けて話が出来るようになった。いろいろ話を聞くのも、これは勉強だという気持ちだった。

小林茂松さんは、「酒を飲まない奴とは本音で話が出来ねえ」とはつきり言う。幸いなことに二人とも酒好きだった。「須田芳明さんや佐々木勝さんが飲みに来てくれて、本音で話し合えるようになったのは嬉しい」と、内藤恒人さんをはじめ指導員たちは皆口を揃えて言う。今では衛生指導員の信頼が最も厚いこの二人である。

佐久病院の八千穂担当も積極的に付き合った。「やはり、佐久病院の力って大きいね」と佐々木さんが感に堪えたように言う。この中には酒の力も入っているらしい。

衛生指導員の篠原始さんもこう言う。「佐久病院の看護師はみな豪傑だね、酒を飲んでも凄いと。まさか全部が豪傑とはいえないだろうが、サケ病院の名だけは汚してはいないようだ。」

八千穂村の良いところ悪いところ

グループワーク方式で

八千穂村と佐久病院で、年に一回健康管理合同会議が行われる。両者合わせて約百人近い出席がある。

「タラの芽会」が両者の親睦の会だとすれば、こちらは健康管理の一年を振り返って、新たな取り組みを論議する大事な会議だ。といっても、後で必ず懇親会があって、一杯飲む。中には会議よりこちらが楽しみだという人も何人かいるが。

ところで、七、八年ほど前、岩崎正孝さんが指導員会長るときに、「ただ話を聞くだけの会議じゃ面白くねえな。なんとか皆が喋れるよいやり方はないか」という意見が出た。

たしかに数人の人が若干意見を述べるだけで、大体説明を聞くだけに終わってしまうことも多い。たしかに、これだけ大勢いると、発言しようとしてもちよっと気後れする。

それに衛生指導員は多少慣れてはいるけれども、女性の健康づくり推進員さんが発言するときは、メモを見ながら、しかも手が震えていて、大変な思いで伝えているという様子が伺えた。

もっと気楽に、誰でも一言ぐらひは喋れるようにしようではないかと相談した結果、グループワーク方式でやろうということになった。

これは、出席者が七、八人ずつ十ぐらいのグループに分かれて、同じテーマで皆が発言し、意見を交わすのである。

村との事務局会や指導員会で打ち合わせをくり返し、指導員が進行役、役場と病院のスタッフが支援、各グループにはテーマにあった助言者を依頼することなどが決まった。

グループの討議が終わった後、そのまとめを全体会議で発表するのだが、グループごとに意見がいろいろなのが面白い。これには進行役の能力が要求されるが、その点、衛生指導員は抜群だった。

人情が厚く気持ちややさしい

新しい方式になって、皆の表情が生き生きしてきた。楽しみながら大勢の人が気軽に発言で

きるようになり、会場の雰囲気はずっと和らいだ。それに知らない人同士のコミュニケーションもよくなり、職種や所属にこだわらない仲間づくりができてきた。

年々討議の進め方や発表の仕方もうまくなり、指導員のリーダーシップも向上した。ここが住民参加の一つの場になったといえよう。

平成十五年度の合同会議では、「八千穂村の良いところ、悪いところ」について、グループ討議も含め皆で話し合った。

衛生指導員の篠原始さんは、「八千穂村に住んで良いと思うところは、自然のまま緑が多く、水と空気が良く四季がはっきりしていること、人情が厚く、気持が優しく人がよいこと、乳幼児、高齢者に対しての健診の充実、未就学児の医療費の無料、子育て支援にきめ細やかなところ」と八千穂村の良い点を述べた。

その他、出席者からは、「保健や福祉がきめ細かくて暮らしやすい村」「声かけをすると、皆がついてきてくれる村」「保健師と住民が隔てなく方言丸出しで話し、友だちのような村」との発言があった。

一方、八千穂村の健康管理を指導していただいている専門家たちからは、厳しい意見が続いた。

佐久保健所保健師の堀田みさこさんからは、「昭和四十三年にはまだ他ではやっていない学

童の貧血検査を始めているし、五十三年には中学生のコレステロールの検査を取り入れ、大人だけでなく、これから育っていく子どもたちのことを忘れていなかったのはすごいが、最近はその子どものコレステロール値が増えてきている。いまは食べるものがいっぱいあって、子どもの食事が親の手を離れてしまった。食を通して健全な子どもを育てることに、もう少し目をむけてほしい」との発言があった。

子どもの虫歯が多いのは問題

また在宅歯科衛生士の宮島典子さんは、「住民健診では内科健診のあと、皆当たり前のように歯科健診を受け、歯科指導のコナーに立ち寄っていくという意識の高さには驚いたが、しかし三歳児検診で見ると、六十五%の子どもにも虫歯があり、長野県平均よりはかなり悪い。子どもの生活がある程度の年齢になると、親の目が届かない所にきている。口が健康だということとは、自分自身の健康にとって、とても大事なことなんだということを住民の皆さんに分かってほしい」と要望した。

地域の中で、理学療法士として活躍されている中村崇さんからは、「八千穂村はこの界限ではいち早く、ヘルスアップ教室という形で転倒予防を始めた。それは良かったのだが、問題は転びそうな人が来ない。転ばない人だけが来る。バスを出しても誰も乗らない。東京だと一カ

月五万とか十万とか出してもやってくる。健康に対して過保護になっているのでは。また引きこもりの原因は腰や膝の痛みにあるので、痛みをとる作戦にぜひ取り組んでほしい」と述べた。いずれも耳に痛い発言であった。

最後に佐久総合病院の西垣良夫健康管理部長から、「私たちは村といっしょに健康管理の仕事をやっているので、客観的になかなか見られないが、全国の八千穂村健康管理に対する評価はものすごい。やはり全国のみなさんがしっかり見ている。衛生指導員が女性の健康づくり推進員と連携をとりながら、リーダーシップをとってやって来た歴史はたいへんなものだ。今後問題については、まだ高血圧や塩分摂取量も多いし、肥満や子供の虫歯の問題もあるので、さらに村といっしょに取り組んでいきたい」と締めくくった。

健康管理合同会議は、衛生指導員を中心に、八千穂村住民と村役場と病院とが率直に意見を述べ合う場として、すっかり定着してきている。

みんなで育てる八千穂の子

「やちの子教室」が大人気

子どもの健康問題については、平成十三、十四年の合同会議でも十分討議されたのだが、これからの八千穂村健康管理の大きいテーマの一つである。

新しく指導員OB会長に推薦された高見沢佳秀さんは、「子どもの健康意識も高めていかなくてはならないが、それには若い母親を教育しなければダメだよ」と言う。

OB副会長の今井恭夫さんも「子どもの問題には親に責任がある」と言っただけで済ませようというのではなく、

「若い母親でなかなか地域にとけ込めず、自分の殻に閉じこもってしまう人がいる。子どもが遊びに行くといえば、大体外ではなくて中で遊ぶが、三人寄れば、みな違った遊びをする。一人はパソコン、一人はゲーム、一人はマンガというふうだ。つまり同じ遊びができないんだね。これは親の行動とも関係がある」と。

昔と違って、今は女性の人たちが集まって何かやるということがなくなった。だから若い女性も育児の知識がない。

「今の嫁さんたちは子どもをつくることを知っていても育てることは知らないね。いろいろな機会を設けてやらないと自信が出てこない」と今井さん。

八千穂村では、今「やちの子教室」というのを教育委員会が主催で開いている。保育園に行く前の子ども、つまり三歳未満の子を持っているお母さんたちが、月に一度集まって、お互いの悩みを話したり、保健師さんの話を聞いたりしている。

歯科検診もある。ときにはボランティアも出てくれて、紙芝居をしたり、七夕の行事をしたり、夏には水遊びをしたり、結構楽しいらしい。時間がきてもなかなか皆帰らない。八巻保健師さんたちが熱心に指導している。

教育費の増加が負担に

「あれはとてでもないよ。一回行ったら楽しいから毎月行く。若妻の教育になっているね」と指導員副会長の内藤恒人さんは大いに評価。だが、「そこに集まった人たちも、子どもの年齢が過ぎるとまたバラバラになってしまう。本当は地区でまた続いていくといいのだが」という意見も。

村では、そのほか、住民課主催で、一歳未満の子どもと母親を集めて、「子育てランド」というのを毎月開いている。村では結構若妻と子どもの健康教育には力を入れているのだが。

「子どもに虫歯が多いというが、お年寄りがいるとアメとムチではなくて、アメだけになっちゃうからね」と内藤さん。OB副会長の佐藤義隆さんは、「いや、それができるだけでも子どものためにはいいんだよ。今は核家族になって育て方も知らない父親や母親が増えたからね。親を教育したらどうかというのはそれにつながっている」と。

共働きが増えたのも、子どもをみるのが疎かになった一因でもあろう。父親の夜勤が増えたなど、仕事そのものが不規則になってきている。これは八千穂村だけのことではないが。

その理由の一つに教育費の増加がある。今の一般的な家庭の教育費は収入の三割だそうだが、これは年間収入六百万円の家計でのことだが、それより収入の少ない人は四割、五割になる。佐藤さんは、「夫婦共働きじゃなければ、とても学校へ出せない」と言うし、高見沢さんも「一人の働きで子どもを大きくするなんて無理だよ」と言う。

競争社会、カネ中心社会の歪みが大きく家庭にのしかかっているのだ。

親子セミナーを開いては

「健康管理を本当に進めていくには、子どもでなくて親だよな」と高見沢さん。「衛生指導員がどのようにして親の意識を高めていくかが問題だ。各地区で若いお母さんや父親を集めて、いろいろな問題をクローズアップしていけば、皆関心を示してくれると思うんだけどな」と。

「八千穂村では大人も子ども同じ検査内容で健診をやっているから、いっしょに生活指導をやったらどうか」と佐久病院の小林保健師が提案する。

「白田町ではプログラムを開発して、親子の検診結果が同時に同じ報告書の面に出るようにしている。この家は全体に甘いものが多いとか、子どもは良いけれどお父さんの食生活はでたらめだねとか、見比べができるようになっていく。ただ同じ家族でもプライベートがあるから、そういうのは嫌いだという家族には出してはならないけど」と。

「そりゃ良いアイディアだ。親と子の会話ができるね」と内藤さんがたちまち賛成。「だけど、お父さんは異常が多いけどどうしたの、と文句を言われそうだな」とも。

佐藤さんからは、「衛生指導員会で、健康についての親子セミナーを企画したらどうか。皆に問いかければかなり集まってもらえるのでは。もちろん行政からもバックアップしてもらって」と提案があった。これには皆大賛成。

他にPTAの人たちと合同で学習会をしたらどうかという意見も出た。

「それには現役指導員だけでは力が足りないから、ぜひOB会の人たちの力も借りたいね」と現指導員会長の吉沢憲一さんが言う。「OBは八十人いるし、経験が豊富だから」と。高見沢さんも、「まずOB会のみなさんに村の現状をよく分かってもらって、皆で協力できる点はやっていこう」と前向きな発言。

「なにしろOB会は八千穂の宝だもんね」と小林保健師が持ち上げる。「そうなんだよ、栄子さん、いや保健師長さま」とちよっとおどけてみせた内藤さん、「結局はおれたちがOB会を利用すればいいんだよ」と。「そうだよ。そういうことだよ」と皆が同調したところで話は終わった。

OB会の今後の活動に大いに期待しよう。

エピローグ・主役は住民

親子二代の佐々木村長

ところで、平成十五年九月、三期十二年にわたって務められた高橋秀一村長さんに代わって、新しく佐々木定男村長さんが誕生した。佐々木村長さんは、健康管理の初期に村長をやられた佐々木庫三さんのご子息。親子二代にわたる村長さんとは珍しい。

佐々木村長さんは、就任にあたって、「健康で長生きするために佐久病院とともに歩んできた村ぐるみの健康管理には、長い歴史と村民の熱い想いがある。衛生指導員を中心に、健康づくり推進員、住民のみなさんといっしょに、さらにこれを進めていく。そのために、これらの組織はずっと堅持していきたい」と述べた。

ご父君と似て、もの静かな語り口だが、その奥底には、固い信念と決意が伺えた。八千穂村の健康管理はゆるぎなく、さらに続けることが決まった。

劇に出て人生観が変わった

衛生指導員たちは、相変わらず劇の練習に余念がない。恒例になっている「健康と福祉のつ

どい」(従来の「健康まつり」が、最近はこう名前が変わっている)での劇の上演が、十月十九日に迫っているからだ。

今回の劇は、「痴呆と家族」。痴呆についての劇は今までも何回かやっているが、痴呆症高齢者が増えていることもあって、今回も痴呆の問題を取り上げた。脚本はやはり高見沢佳秀さんの書き下ろし。今回は、今まで裏方ばかりやっていた指導員会長の吉沢さんが初めて出演するというので、練習にも熱が入る。

いよいよ当日。出演者の熱演で劇は大いに盛り上がった。衛生指導員になって三年の間に、皆の演技が向上しているのには驚く。今回の配役には指導員の他に、女性の健康づくり推進員(以下推進員と略)が二人加わった。

その中の一人、佐藤千代子さんは三十七歳の長女役をやった。六十二歳になって初めて劇に出たのだという。後で佐藤さんはこう語る。「今までは人の後ろに付いていて前には出なかつたけれど、私をこんな大勢の中から選んでくれてとても嬉しい。劇に出て人生観が変わった」と。たまには指導員が裏方になって、こういう方々に表に出てもらうことはとても大事なことだ。別に、よい演技者を見つけたということだけではない。表に立つことによって、その人の人生観を変えてしまうこともあるのだ。これも健康教育の一つといえようか。

後ろからサポートする

佐久病院に何回も見えたことのある医師のスマナ・バルアさん（バングラデシュ出身・現W
HO医務官）は、地域と教育の会の全国集会での講演でこんなことを述べている。

これは、中国の偉大な教育者、晏陽初（一八九三～一九九〇）の「人々の中へ」という詩で
す。

人々の中へ行き

人々と共に住み

人々を愛し

人々から学びなさい

人々が知っていることから始め

人々が持っているものの上に築きなさい

しかし、本当にすぐれた指導者が仕事をしたときには

その仕事が完成したとき

人々はこう言うでしょう

「我々がこれをやったのだ」と

教育者の哲学だと思えます。学生が自分たち自身で努力しているのだ、と感ずるくらい、教師は表には出ずに後ろからサポートするのです。(後略)

これは主に教師を前にして語った言葉だが、健康教育に携わる者にも、当てはまるのではなからうか。担当者は脇役になって、常に住民を主役に導くのである。

役場の佐々木衛生係長さんも衛生指導員に対して、上からこうしろ、ああしろとは言わない。ある程度、衛生指導員にまかせて、自分は側面からサポートしている。衛生指導員は自分でやっただと思っているが、実際は係長さんの目論見どおりに事が進んでいる。

「係長は女性をまとめるのがうまいじゃん」と指導員副会長の内藤恒人さん。「いや、男をまとめるのがうまい」と、元会長の茂松さん。「最近はいいように乗せられているね」と現指導員の篠原始さん。勝手にいろいろ言っているが、みな納得している。

「だけど、やはり女性のほうがいいね」と係長さんがつい本音を。指導員や推進員が自発的に仕事ができるように、裏から支えているのはたいしたものだ。行政はこうでなくてはいい。

自ら黒子役になって

最近では、衛生指導員たちも分かってきたようだ。自ら黒子役になって、推進員や住民を表面に立てようと考えている。

大石区の衛生指導員の篠原始さんは、「福祉と健康の集い」の目玉になっているブロックごとの研究発表で、従来のように指導員が発表することはせず、推進員が分担して発表するように仕組んだ。

始さんは言う。「女性は引っ込み思案になりがちだし、自分からマイクを持って喋って発表する機会が少ないからね。一人ひとりを表に出すように考えた」と。

「マイクを持たせれば、みな結構よく喋るね。始さんは推進員をヨイシヨするのがうまいんだよ」と、恒人さんは半分やつかみ顔。ある程度任せるということで、皆が生き生きとしてくるのがよく分かる。

ある日の衛生指導員会で、八巻保健師さんが感心したように言う。「始さんて、最初に会ったときは、どこかのヤクザかと思っただけけど、つき合ってみると、若々しいし積極的だわね」と。そういえば、吉沢さんにしても恒人さんにしても、若々しく女性の推進員にはもてるらしい。

たまたま今年の研修旅行の思い出話になった。バスの中で、恒人さんが女性に囲まれている

写真がある。とても幸せそうだが、どう見ても二十代に見える。だが、くわえタバコをしているのがちよつとまづかった。

「あれでくわえ煙草がなかったらもつと良かったね」と誰かが言ったので皆どつと笑った。笑い声は、ドアを振るわせて、秋空へと忙しく抜けていった。

(完)

あとがき 八千穂村が大好きです、ありがとうございます。

定年で病院を辞めて1年くらいたった頃でしょうか、松島先生から八千穂村の健康管理について「衛生指導員ものがたり」という題で、シリーズ的に病院の機関誌「農民とともに」に書いてゆきたいので、一緒に担当して欲しいんだけど、というお電話がありました。「飯嶋君と横山さんとボクの3人が交代で、受け持てばいいから楽でしょ」と、もう書くのが当たり前とといった感じでしたから、私は力量も無いのに取り付くことになりました。

実は、定年前に八千穂村のことをキチンとまとめて来なかつた思いがあり、まとめ方として衛生指導員に焦点を当てる形というのが、ちょっと気を楽しませてくれて、頑張つて整理しようと思つたものです。八千穂村の健康管理における住民組織との協働的な、村ぐるみの「健康な地域づくり」の象徴である衛生指導員をテーマ名にするところも、面白いと思われました。

始めるとなると松島先生は、矢つぎばやに私たちに招集をかけて、編集方針や字数、そして連載するテーマを40項目くらいあげ、「初期のこのあたりまでは横山さん、後期の方は飯島君かな」などと分担を決め、「すぐにも書いてみてよ」などと大変な意気込みです。普段はどちらかと言うとおっとり構えられる先生が、編集となると意欲満々で、つぎつぎと発想が湧い